

## 脳性まひだからこそ!?



## 大畑 楽歩

(整理収納アドバイザー/Office-楽歩代表)

6年生になる一人息子は、昭和のガキ大将も恐れをなすぐらいの勢いで、一心不乱に遊びまくっている。放課後の我が家は、たいてい10人以上のお友

い、歩行困難があり、自宅でもしばしば転倒し、顔面に外傷が絶えなかった。地域には歩行を指導できる理学療法士はいなかった。

そこでこの制度を使い、基幹病院の理学療法士が自宅に繰り返し訪問し、どこで転倒しやすいのか、どこにどのようなに手すりを付け、どこで段差をなくすか、日常的に歩行器の使い方、歩行訓練の方法を家族に指導した。その後Bさんの転倒は減っていった。

また嚙下障害があるCさんの場合は、Cさんがデイサービスを利用し食事をする場合に病院言語聴覚士が出勤し、施設看護職、介護職に食事の仕方や練習の仕方について指導した。数回の指導で食事方法の工夫や嚙下訓練の仕方を介護職が学び、その後家族の指導に生かされた。

中山間地域にはリハビリ専門職はほとんどおらず、介護保険が始まった事実上訪問リハビリのメニューを組む

ことができない。そこで診療所が必要とする患者さんや場面を選び、病院セラピストに現場に何度か出かけてもらい、状態の評価、環境設定、訓練の仕方を看護職、介護職、家族に具体的に指導し再評価も行うのである。こうした取り組みで、看護職、介護職、家族は、患者さんの今後の介護やリハビリの仕方に安心して目標を持つことができ、継続できるようになっていった。

## 今後の課題

平成21年7月、弥栄地域は高齢化率43%を越え、診療所の患者さんは80歳代が最も多くなった。日本における、世界における超高齢化の最たる地域である。

自立した90歳代を目指した取り組みも始まっている。しかし人生の締めくくりをどうするかについて、正面から取り上げられることはまだない。年間

達が入れ替わり立ち替わりで、月曜から金曜までイロトリドリメンバー。息子とつるみながらも、平成の時代を生きた子どもたちはみな、習い事で忙しく、どうにか合間を縫って「今日の10人に選ばれた」と、学校で壮烈な争いを繰り広げている。息子は毎日、学校や放課後の我が家で苦戦しながらも、上手にまとめていく。

そんな息子がふと、「楽歩をみると「障害」って、なにか特殊能力があるように思えて羨ましいねん」というので、「ほな、なれるものなら、なってみたい?」といたずらっぽく聞くと「いやいや楽歩をみてるからこそ、僕は障害者になりたくないし、絶対ムリ!だって五体満足な力さえ活用できていない僕やで!」と自信たっぷりに答える息子。『ほく、なるほど!』と私。かわいそうとかではない確たる理由をしっかりと持っている。

世の中とかく「白」か「黒」に分け

30数名が亡くなり、そのうち5〜6名が在宅死で、大半が病院で亡くなる。独居や介護力が低下した家庭で在宅看取りの条件は限られている。

一方地域には、特別養護老人ホーム、養護老人ホーム合わせて120床あり、私たちはこれらを活用し、施設看護職、介護職と力を併せ、福祉施設での看取りの経験を積んできた。家族に介護の負担をかけず、家族や地域の人に囲まれて安らかな最後を迎えるケースがほとんどである。今後地域住民が気軽に施設に訪れ、自分たちの施設と感じられるように開かれた施設になっていくことが望まれる。

リハビリの目指すところはその人らしい生き方であり、死に方である。最後をどこで亡くなるかだけでなく、食べられなくなったときどうするか?など具体的な状況を地域住民と共に考え、地域の条件を活かしたより豊かな選択肢を創っていきたい。

たがるもので、「障害」に対するイメージにしても、「神に選ばれし人間」か「バチ当たりな奴」かに分類されるのがオチで、稀にグレーゾーンの方に出くわしても、単に何も考えてなかった…というのとどの詰まりであることが多い中、さすが私に育てられた息子だわ!と、母としての喜びと、障害者としての妙な優越感に浸ってしまいました!

そりゃ長く障害者をやっていると、障害者でラッキー!と思う瞬間もありますが、どれも利他的なことに思えて「優越感」に浸れるような場面には、なかなか出くわさないものです。

でも先日、誰の手にも負えなかった祖母の家の片づけを全うし、家として蘇らせたとき、「行き止まりさえもひっそるめ、これこそ愛すべき我が人生!障害者も悪くないぞ」と。



before

う始末。家族がきらめモードになっても、部屋の状況は変わることなく、刻一刻と「モノ」に占領されていく中、ついに民生委員さんも、ほっとけないと乗り出すものの、魔の3日目にしてOUT!

そんな歴史が繰り返されてきた中で、いくら整理収納アドバイザーの資格を所有している私でも、祖母の家はハードルが高すぎるわくと怖じ気づいていると、『別に不自由はしてへんし心配せんでエエよ。ただ：倒れるときには、表まで出て部屋に鍵をかけてから倒れなあかん。それだけや!』とお茶目な表情で語る祖母。

『おばあちゃん、これじゃ、救急隊員が駆けつけてくれても、担架を運び入れるのに、レスキュー隊呼ばなあかんやん!』とふたりして大笑い：モノをかき分けながら、『つまづかんとしてや!』と身体の不自由な孫を氣

遣う米寿の祖母。

長年、孫たちは誰一人として立ち入り禁止だった家に、祖母は、まな板の鯉状態で部屋中を案内してくれました。

それだけに、孫だから、整理収納アドバイザーだから、という理由で、簡単には片づけさせてくれるはずがないと感じた私は、『本当はアドバイザーとして、もつと現場のお仕事をしたくてウズウズしているんだけど、なかなか障害者だと依頼されにくいのよね。だから、おばあちゃん! モニターになってもらえないかな?』と祖母にもちかけました。

これは、私の本音でもあったのです! 困った表情を浮かべながらも、可愛い孫のためならと、片づけることを許可してくれたのです!

床も、テーブルの上も下も、ぎっしりとモノが積み上げられていて、片づ

ける為の作業スペースすら見いだすことが困難な状況。

全捨てしても問題なさそうに見えるダイレクトメールや裏紙の間から、銀行のキャッシュカードなど大事なものを、次々と発掘。

これは、がさつ! と捨てるわけにはいかなさそう。

祖母の88年間の人生を紐解いて行く気持ちで、ゆっくり、あせらず向かい合うことに。

「もったいない」気持ちに寄り添いながら「でも置いとくだけじゃもったいないし、使いきれないモノは手放そう! スペースがもったいないやん」と根気よく、繰り返ししていく私。

祖母にとっては、すべてが宝物で、残しておきたいものばかりの中、厳選に厳選を重ね、壊れたものや、腐敗し



after

たもの、使わないものは取り除き、必要なモノだけになり、壁さえも見えなかった空間はいつしかスッキリし、ほかほかとお日様が差し込む明るい部屋になっていました。

快適な空間で過ごすより、不必要なモノを処分することの方が辛いから、スッキリした暮らしはしたくない! と言っていた祖母が、日差しが舞い込む

リビングで、コーヒーを飲みながら水彩画を楽しみ、片づいてからは、訪ねてきて下さる方々と気軽にティーパーティも楽しめるようになったのよ! と、電話口で声を弾ませる祖母。

他の誰でもない、私だからできたこと!

たとえ自己満足でも、障害者としてのシアワセが全身を駆け巡るのでした。



日差しが舞い込むリビングで祖母と